

ウェブレイヤを参照用レイヤとして使う

TNT 製品では、個別の位置に分かっている座標を入力したり、参照レイヤを使って対応する位置の座標を提供することで、ラスタや図形レイヤのジオリファレンスを行うことができます。ジオリファレンスされるオブジェクトは、プロジェクトファイル形式や MrSID、JPEG2000、DWG、シェイプファイルなどのような直接使用することができる形式のラスタや図形レイヤです（詳しくはテクニカルガイドの“システム：地理データファイルの直接使用 (System: Direct Use of Geodata Files)”をご覧ください)。参照するレイヤもこれらの形式で構いませんし、ウェブマップサービス (WMS) や ArcIMS レイヤであっても構いません。

世界中で 100 万以上の WMS があり、その数の約半分の ArcIMS レイヤが使用可能なウェブ上にあり、参照レイヤとして選択し、自分のデータをジオリファレンスすることができます。マイクロイメージ社は、ハワイとアラスカを除いた陸続きの米国の WMS から 1メートルおよび 2メートル解像度の全州をカバーする画像を持っています。このデータは元々全米農業イメージプログラム (NAIP) の一部として米国農務省 (USDA) によって入手されたバラバラの郡単位のデータとしてダウンロードされました。ある年に入手可能な全ての郡のデータを TNTmips を使ってモザイクしました。<http://www.microimages.com/geodata/StateOrtho.htm> から参照用レイヤとして使用することができます。

また、TNT 空間エディタを使って、WMS や ArcIMS レイヤを新しい図形レイヤの判読に使用することができます（詳しくはテクニカルガイドの“空間エディタ：ウェブレイヤを参照レイヤとして使う (Spatial Editor: Using Web Layers as Reference Layers)”をご覧ください）。

TNT のジオリファレンス処理でオーバーレイ表示されている入力と参照レイヤ。2つの画像のマッチングを上手く示せるように 1939 年の航空写真の透明度を 50 パーセントにしています。拡大図は、変化によって画像の南東部にコントロールポイントがないにも関わらず、非常に上手くマッチングしていることを示しています。

